

2012年2月19日

2012年1月 371号

さて、今回は、テューリンゲン州の Hildburghausen という小さな町が話題です。私は、Meyers Lexikon という百科事典のことは知っていましたが、この町がその百科事典の発祥の地であることについては全く知りませんでした。また一方では、この町は、生産年齢における雇用率が最も高いということも知りましたが、その実態は人口減による分母の縮小による雇用率の上昇ということで、決して歓迎できる状況ではないことも分かりました。また、時間給労働者や低賃金労働者により雇用率が上昇しているに過ぎない側面もあるようです。これに対応するために行政も Berufsschulzentrum や Ausbildungszentrum の設立により若者を地元につなぎ止めようと必死になっている様子が見えます。今回の課題は、全体としては非常に難しいという内容ではなかったと思いますが、一箇所どうしても理解できないところがありました。正解が待ち遠しいところです。

1 月のテキストでもう一つ特に興味があったのは、2011 年がドイツとトルコ間の Anwerbeabkommen 締結 50 周年に当たることから、その特集をしたラジオ放送でした。この種のテーマをゲーテの授業でも扱った時に紹介された ZDF の特集番組 ("Hurra, die Türken kommen!") や昨年ドイツで公開され、140 万人の観客を動員した映画 ("Almanya - Willkommen in Deutschland" 私はこの映画を 1 月のドイツ映画祭で見ました。日本語字幕付きでしたので、理解できました。) により、今まではあまり興味を持っていなかったドイツにおけるトルコ人にも興味を持つようになりましたの両国の 50 年の歴史を経て今や、ドイツにおいては、いわゆる労働者のみならず、政治家、大学教授、サッカー選手、喜劇役者、ジャーナリスト等などのトルコ人も増えているようです。今後は、そのような女性ジャーナリストの一人が書いた本も読んでみようと思っています。

K. K.

2012 年 3 月 18 日

2012 年 2 月 372 号

さて、今回は、スイスの原子力発電の安全性の問題およびドイツでの風力発電の問題がテーマです。

東日本大震災およびこれに起因する福島原子力発電所事故からちょうど 1 年が経過しましたが、報道によりますと、被災地での状況が改善された部分もあれば、原発事故の福島では、自分の故郷に帰れない多くの人たちが各地に生活せざるを得ない状況が伝えられています。

この福島の事故が契機となり、ドイツでは 2010 年に既に決定していた原子炉稼働延長を撤回し、2022 年までに段階的に原子力発電を廃止することを決定しました。一方、スイスにおいては原子力発電を廃止はしないものの福島の事故を教訓にすべく、原子力監督官庁が分厚いレポートをまとめたようですが、「絶対安全な」原子力発電は存在しないということについては、触れていないとのこと。これでは確かに **Green-Peace** でなくとも賛成できないと思います（日本においても同様の動きがあることは残念です。おそらく **verfilzte Kontrollbehörde** が原因だと思います）。

ところで、この **verfilzt**[**verfilzen** r. **Filz**, -e] という語については、私の持っている 5 種類の独和辞書および **Duden Deutsches Universalwörterbuch**, **Langenscheidt** および **Pons** のいずれの独々辞書にも今回のラジオ放送で使用されている意味が記載されておらず、**Beiheft** の解説（**enge Beziehungen zwischen Politikern, Behörden und Privatwirtschaft**）が非常に役に立ちました。以前別の課題の際にも同じようなことがありましたので、ある言葉が新しい意味を持つようになって辞書の改訂が追いついていないのでしょうか。今後もこのような語句の解説をお願いいたします。

K. K.

2012 年 4 月 27 日

2012 年 3 月 373 号

今回は、Einsamkeit がテーマですが、なるほど Alleinsein と比較して見ると、その相違が分かるような気がします。私は今までそれらの相違について改めて考えたことはありませんでしたし、またこれらを subjektiv と objektiv という視点での対比は新鮮でした。

ところで、この放送では 5 名がインタビューされているわけですが、その内の 1 名は現在服役中の Gefangener です。日本でも服役中の Gefangener が本を書いて、その本を出版することは時折ありますが、今回のように服役中の Gefangener が取材され、インタビューを受けていることは、日本では考えられないことです。ドイツではこのようなことが一般的に可能なのでしょうか。また 2011 年 11 月号だったと思いますが、現役の判事がその業務中の取材を受けていたのも思い出しました。このときも司法における日本とドイツの違いを感じたものでした。

また、今回は Beiheft (19 ページの 27 行目)に Vollzähligkeitsüberprüfung という単語が出てきます。これは、「全員(全部)がそろっていることを確認すること」だと思いますので、ここではいわゆる「点呼」だと思いますが、それ以外にもいろいろな場面で、例えば、仕事の中でも、仕事以外でも使えるような便利な単語だと思います。是非、何かの機会に使ってみたい単語の一つです。

K. K.

2012 年 5 月 27 日

2012 年 4 月 374 号

今回は、Gymnasium の期間短縮がテーマですが、ドイツは思い切った変更をしたものだと思います（日本では第 2 次世界大戦後にドイツの Gymnasium に似た旧制の高等学校を廃止しましたが、その後は大学入学前の試験制度は何度か変更されたものの、学校制度の変更はありませんでした。現在日本では、世界の趨勢に合わせるために、東京大学が提案した大学の秋入学の導入が大きな話題になっています）。

ドイツでの Gymnasium の期間短縮は、多少の混乱が生じることを覚悟しても、得られる利益のほうが大きいと判断したものでしょう。かつて大統領の発言にもありますように、“gestohlene Lebenszeit”を解消することが優先されたものでしょう。昨年 11 月のニュースだったと思いますが、大学入学者数が 50 万人以上に達し、前年比で 16%もの増加だったことが伝えられました。その原因の一つとしてこの Gymnasium の期間短縮により、従来制度の終了生とこの新制度による終了生の 2 学年が同時に入学したことが挙げられていたことを思い出しました。

また、Gymnasium の期間短縮を州ごとに時期をずらして実施していることは、ドイツの夏休みが州ごとに期間をずらして実施されていることを連想しました。今月は、中央集権的な日本でのやり方と、地方分権の発達しているドイツのやり方との違いを感じる課題でした。

K. K.

2012 年 11 月 4 日

2012 年 5 月 375 号 及び 6 月 376 号

まず 5 月分 (Nr. 375) ですが、第二次世界大戦後 65 年以上経過した現在においてもドイツとフランス両国間では戦争孤児の問題が存在し、かつこれがタブーテーマになっていることに驚かされました。 もっとも、日本と中国との間においても類似の問題はありますが、陸で国境を接しているドイツとフランス両国間のほうがより問題が深く、広がっているものと想像されます。私自身は過酷な戦争を体験していない世代ですが、平和な時代（全世界を見渡せば、ちょっと前の旧ユーゴスラビアの宗教や民族をめぐる内戦や、現在のシリアの内戦など全く平和とは言えませんが、65 年前の日本から比べれば現在の日本を取り巻く環境は平和そのものです）に生きていられることは本当に幸せなことだと痛感します。

次に 6 月分 (Nr. 376) においては、旅行記がテーマになっていますが、やはりこのテーマにおいても第二次世界大戦後とその後の分断された東西ドイツの歴史が大きく関係していることに気づきます。確かに現在の多くのドイツ人にとってドイツは近くて遠い国であると同時に、既知でもあり道でもある国ですが、これも分断と再統一というドイツの歴史を知れば納得できます。秋の並木道でのドライブが「水族館」に例えられています。これは私も自分の経験からもその情景を容易にそうぞうできます。

今回見つけた興味ある表現は、„ein erklärter Auto-Gegner“（31 ページ 12 行目）です。Gegner の代わりに Befürworter を使えば反対の意味を表現できそうですし、いろいろ応用が利くような便利な表現だと思いました。今回のテキストでこの表現を知りました。辞書には、類似表現として *entschiedener* がありましたが、私は„ein eingefleischter Junggeselle“を最初に思い出しました。

K. K.